

2017年7月30日

朝鮮半島の冷戦史研究の新展開をめぐって—特に1970年代を中心に
(東京大学 韓国学研究部門)

1970年代の北朝鮮軍事・外交政策の争点と解釈

政策研究大学院大学

道下 徳成 (みちした なるしげ)

michi@grips.ac.jp

<https://twitter.com/NaruMichishita>

<https://grips.academia.edu/NarushigeMichishita>

*全体

- ・60年代と80年代はストーリーを作りやすい。70年代はグニャグニャして捉えどころがない。
- ・2つの可能性—①過渡期だったから。②実は静かな一貫した流れがあった。
- ・道下—②。北朝鮮は軍事力で南北の競争に決着をつけようとする最後の試みを行った。韓国は軍事力で南北の競争に決着をつけることのできない体制を構築しようとした。結局、韓国が勝った。

*総合評価

- ・1970年代、北朝鮮は軍事・外交政策において、各種のイニシアティブをとり現状変更を図ろうとした。しかし、最終的には、武力統一を試みたいという気持ちに基づく軍事のロジックを優先してしまったうえ、結局、その試みは挫折した。また、金正日も思いつきの行動をとって北朝鮮の外交的立場を悪化させた。
- ・70年代の北朝鮮の動きが分かりにくくなったのは、本格的な通常戦のための準備を行い始めたため、60年代にみられるような具体的な軍事行動がみられなくなったという背景もある。

1. 軍事政策の評価

*評価

ベトナムでの米国の敗北、そして1960年代の北朝鮮のゲリラ攻勢の失敗を受けて、北朝鮮は通常戦による武力統一を目指したが、結局、在韓米軍が撤退しなかったことなどから十分な軍事的優位を達成できず、その試みは挫折した。その結果、膨張した軍事力と停滞した経済が残されることになった。

◆国際環境＝プラマイ両方

プラス：サイゴン陥落、米国の韓国防衛へのコミットメント低下

マイナス：米中関係改善 (米韓 v s 朝中から米韓 v s 北朝鮮に)

◆北朝鮮の行動

- ・通常戦力に基づく軍事ドクトリンの採用
→機械化の推進、沿岸防衛強化 (後方の部隊を機動的に動かせるようにするため)、複数梯団を用いる作戦計画 (76年のキム・チョルマン論文で明確化)。兵力の大増強 (70年代初めの41.3万人から、80年代はじめの67.8万人へ) + 戦車、火砲、装甲兵員輸送車の増強 + 後方地域の戦力を増強
- ・ソ連と中国に武力統一を提案 (軍事バランスの変化を正確に認識し、最後のチャンスと考えたのか)。1975年4月、金日成「もし朝鮮で戦争が起これば、失うのは軍事

分界線のみで、得るものは統一だ」と述べる¹。

◆なぜ、武力統一の最後のチャンスを逃したのか？

- ・十分な軍事的優位を達成できなかった。在韓米軍が撤退しなかった。
- ・ソ連や中国の支援の欠如
- ・北朝鮮の軍拡が米韓の懸念を助長（平和攻勢をかけていたらどうなったか？）
- ・韓国の防衛態勢の変化？（重化学工業の発展。74年に戦力改善計画「粟谷事業」開始。75年に防衛ライン完成）＋75年からは前進防衛＋軍事予算の逆転（防衛税の導入。76年から韓国の国防費が北朝鮮を上回る）＋民防衛法の成立＋76年からチームスピリット演習
- ・中国の協力が望めなくなって、防衛的な体制に転換？
争点：70年代の増強は攻勢のためであったのか防衛のためであったのか？

2 外交政策の評価

*評価

旧植民地の独立、非同盟諸国運動の活発化、米中関係改善など、良好な外交環境のもとで外交攻勢をかけた。その結果、国連における「朝鮮問題」の議論などでは韓国を脅かす状況を作り出すことに成功した。しかし、板門店ポプラ事件を引き起こすなどの失策があり、具体的な成果を出すことには失敗した。

◆国際環境＝肯定的

米中関係改善、非同盟諸国運動（NAM）などの高まり→北朝鮮を承認・支持する国の急増、南北クロス承認の議論

◆北朝鮮の行動

- ・NAM 会議などへの参加
- ・「朝鮮問題」での外交攻勢
- ・米朝関係改善模索（平和協定提案）

◆なぜ、肯定的な成果に結びつけられなかったのか？

- ・「1つの朝鮮」を正統性の源泉として使ったことが外交の柔軟性を奪った。
そのコロラリーとして、北朝鮮が韓国の排除にこだわりすぎ、韓国を含めた対話を拒否した。米国が応じられない二国間交渉にこだわりすぎた。
- ・武力統一と平和攻勢のジレンマ（大軍拡→警戒心の高まり。在韓米軍撤退論の挫折）
- ・板門店ポプラ事件による国際的支持の喪失
- ・米国、ソ連、中国が朝鮮半島における冷戦体制の緩和を望まなかった？
- ・レバレッジの欠如？
- ・韓国（朴正熙）がデタントに乗らなかった？

◆なぜ、板門店ポプラ事件という失策を冒してしまったのか？

- ・「朝鮮問題」などについての外交攻勢による自信過剰？米国や国際社会の反応の読み違えた？
- ・好戦的な精神を軍や国民に植え付けすぎた？
- ・米国将校の傲慢な態度？

¹ 朝鮮中央通信社『朝鮮中央通信 1976』53頁。A Russian foreign service official Valerii I. Denisov, then Deputy Director General of the Russian Foreign Ministry's Asian Affairs Bureau, said in 1996 that although Kim Il Sung asked for support from the Soviets and the Chinese in 1975, saying that he was ready for war with the South, he abandoned his war plan when it was rejected by his Soviet and Chinese allies. 『日本経済新聞』1996年5月23日、8頁。

- ・金正日の若気の至り？金日成が南進したがっていたのを踏まえて攻撃的な態度？
(参考) 現在でも、韓国的外交史料館ではポプラ事件の史料で最も重要な第1巻は公開されていない。

3 金正日のパフォーマンス

*評価

素人的な思いつきで各種の行動をとり、状況を悪化させた。板門店ポプラ事件の原因は明らかではないが、金正日が主導したものであるとすれば、彼が北朝鮮の外交的立場を著しく毀損させたことになる。

・板門店ポプラ事件

→政治的には反金正日勢力の追放に寄与（ハンガリー外交文書。金賢植証言）。外交的には大失敗

・1976年6月の金東奎事件が板門店ポプラ事件の背景となっていたとすると、金正日の役割は大きかったことになる。

・日本人拉致を主導？